

意欲的にさっさと物事に取り組む態度を育てる

松本 洋介

ダウン症児であるK児は、ダウン症候群の身体的特徴である、肥満でずんぐり型の体型、筋肉の低緊張、動作が鈍く敏捷性に欠ける、疲労しやすい等の特徴が見られ、全般に動作が緩慢で他の友達よりも行動が遅れることが多かった。又過保護による甘え、依存的な態度と、競争心が薄いこともK児の緩慢な行動の要因になっている。このK児が、運動感覚機能の向上をはかりながら、徐々に一人で物事にさっさと取り組めるようになってきた経過について述べてみたい。

1. K児の実態と当面する課題

(1) 生育歴

- S52. 5. 23生 10:7才 男子
- 熟産、帝王切開、大声で泣かず哺乳力も弱い。
- 1:6才の時ダウン症候群と診断。
- 2才歩行器使用。
- 3:6才県立療育園に入園。
- 5才Y学園入園。歩けるようになったが、お尻をつき出したよちよち歩き。
- 6:11才本校入学。2年生、3年生に養護訓練(抽出指導)を受け、よく歩けるようになってきた。

	発達年令	1	2	2	3	3	3	4
		:	:	:	:	:	:	:
項目		8	2	6	0	4	8	2
移動運動								
手の運動								
基本的生活習慣								
対人関係								
発語								
言語理解								

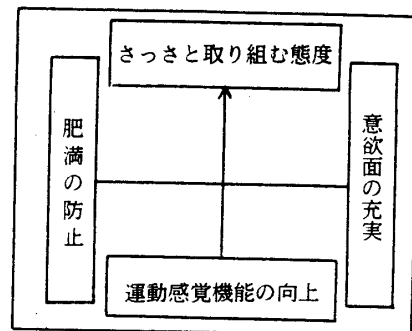
〔遠城寺式乳幼児発達検査〕(図1)

(2) 身体的状況

- 身長138.2cm 体重42.6kg ローレル指数161 (太りすぎ)
- かなり肥満傾向で、肉づきが厚く、腹部が出ていてお尻が後方につき出している。
- S62、6C病院より両外反足と診断され、両足底装具を装着。

(3) 主な問題点

- シャガむ、立つの動作がスムーズにできない。
- 坂道での登り降りがスムーズにできない。
- 前後、左右等の自由な動きが苦手。(特に後方)
- 平均台、ブロックの上などの高い場所の歩行や、障害物を越えての歩行が不安定である。
- 指先を使う細かい作業が苦手である。
- 集団行動では友達よりも一歩遅れることが多い。



〔K児へのアプローチの仕方〕(図2)

2. 研究の仮説と指導方針

これまでのK児の実態や諸検査等からこの研究を進めていく上で、次の様な研究仮説を立てて実践していくことにした。

研究仮説—K児の緩慢な動作は次のような原因によるのではないか。

- (1) 肥満の為に体を十分にささえることができないのではないか。
- (2) 脚力が弱く、平衡感覚、バランス等に問題があるのではないか。
- (3) いろいろな運動の経験があまりないのではないか。
- (4) 甘え、依存的な気持ちが強く、集団参加の意識が薄いのではないか。

以上のような研究仮説に基づき、次のような指導方針で指導を行っていくことにした。

- (1) 坂道歩行、台押し、立つ座る等の動作をくり返す等の練習を通して、脚力の強化を図る。
- (2) 食事の制限をしたり運動量を増やしたりして肥満を防止する。
- (3) セラピーボール、昇降台、ブロック等の器具を使って空間の認知力やバランス感覚を養う。
- (4) いろいろな種類の運動を経験させる。
- (5) 甘えたり依存的になったりしないよう、一人でできることは自分でさせるようにする。

以上のような指導方針の中の、運動感覚機能の向上にかかわるものを中心にして、K児が物事にさっさと取り組めるよう指導してきた。次にその内容について述べてみたい。

3. 指導実践例の一部

(1) 朝の体力づくり

小学部では1時間目を個別学習の時間としてとっており、本学級では子供たちの体力作りを目指して、晴天時には個別指導中の児童を徐き全員を外で運動させている。K児も週4日この体力作りに取り組んだ。主な内容とK児の変容は次のようなものである。

運動の種類	4月の様子	主な手だて	その後の様子
○マラソン	○昨年続けていたことが頭に残っており、2～3周歌に合わせて手を振りながら走る。	○マラソンの時には後でK児の好きな歌を歌い、走る意欲を高めてやる。	○先生と一緒に3周ぐらいコンスタントに走る。途中で休む回数も1～2回と減る。
○つり橋 (校庭の遊具)	○つり橋に登る所と降りる所で必ずお尻をつく。渡り方もお尻をつき出しながらゆっくりで、ぎこちない。	○登り降りの中では、まず手を持って補助し、安心してできるようになってから、鎖を持って渡らせる。	○ほぼまっすぐの姿勢で渡れるようになり、少しぐらいの揺れでも渡り、足がよく上がるようになる。
○丸太渡り (同上)	○両手を補助しながら丸太の上に上がらそうとするが、「ムリ」と言ってしまう。その後片足をのせようとするが、のりかけたところで体を補	○まず体を抱きかかえて補助し、丸太の上にK児が安心して立てるようにし、慣れてきたらそのままの体勢で少しずつ前に進ませ、更に体を少しずつ離	○丸太にのることの恐怖心もとれ、体を支えなくても、両手を持って渡れるようになる。平な木であれば片手だけの補助で、それほど力を入れなくて

	助者にあずけて落ちてしまう。	していく。	も渡れるようになる。
○とび石 (同上)	○片手の補助でとび石の上にのれるが、次の石までなかなか足が出ず、出しても石までとどかずに落ちてしまうことが多い。	○両手で補助しながら、足をなるべく高く上げて前へ出すように指示する。できない時は地面で練習をしイメージをつかませる。	○連続してとび石を渡ることはまだできないが、片手だけの補助でかなりスムーズにとび石を渡ることができるようになる。
○石登り (同上)	○一段ほど登ると、手、足をどの石に置いたらよいかわからず、そのままの姿勢で泣いてしまう。	○手、足の置き場所がわからない時には、一番登りやすそうな位置に手、足を運んで補助する。	○手、足を持って補助をしなくても自分で石をさぐりながら、登れるようになる。
○坂道下り	○体をかなり前傾にし、つま先を少しずつすべらすように出しながら、おそるおそる下りる。	○一番ゆるやかな斜面を選び、前に立って両手をささえながら下りる練習をする。	○急な斜面はまだ無理だが、ゆるい斜面であれば足を10cmぐらい上げて下りれだした。

(2) 個別学習

運動の種類及内容	ねらい	様子
○階段歩行 ○補助者の手を持って階段を登り降りする。	○バランス ○脚力の強化	○階段を登る時は右足、降りる時は左足と決まっている。1学期は1段1段止まりながら登ったが、2学期左足から登るように指示すると、足を交互に出して登ることが数回あった。
●セラピーボール ○ボールに腹臥位、背臥位で乗る。	○正常な姿勢反射の獲得	○腹臥位では前に落ちる時に手をついたりできるが、背臥位では嫌がってなかなか乗らなかった。
●手、足を持ってゆする。	○正常な姿勢反射の獲得 ○空間での認知力の獲得	○手足を持ってゆすり、勢いをつけてマットにのせる運動をしたが、緊張もとれ、姿勢もよく楽しんで行っていた。
●トランポリン ○補助を受けながらトランポリンをとぶ	○足の指の使い方の練習	○補助者に抱きかかえられながらとんだが最初はとぶということが理解できなかった。しかし、徐々に足の裏全体から、足の指を使ってトランポリンの上に立ってとぼうとしたりするようになった。

4. 運動感覚機能の向上と目標とのかかわり

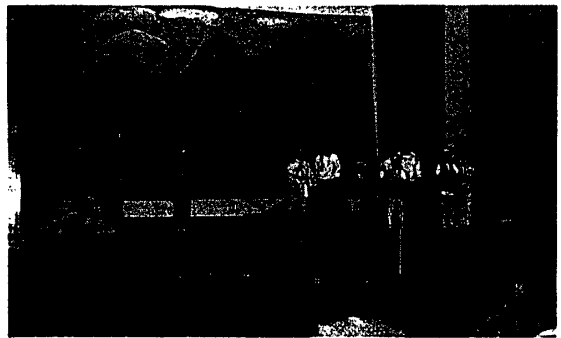
3で述べてきたような指導を中心にK児の運動感覚機能の向上をはかってきたが、それがK児の目標である意欲的にさっさと物事に取り組む態度にどう結びついていったか、合同学習のひとつである学習発表会を例にとって述べてみたい。

本年度の小学部の出し物は「さるかに話」でK児はうすの役を演じた。うすは4人いたがその中の中心で、はち、くり、かにと一緒にさるの家に行進する場面や、さるをやっつける場面があった。さるの家に行進する場面では、他の3人がかなり速く歩けるので一緒についていけるかどうか心配であったが、補助を受けずに手を振りながら遅れずに元気よく行進することができた。又さるをやっつける場面でも、さるをつかまえて大きな身振りで演ずることができ、予想以上に見通しを持ってさっさと取り組めた。

又もうひとつの出し物である合奏では、カスタネット、小太鼓、シンバルの持ちかえがあったり、それにともなって場所移動などがあったが、少しの補助や声かけで、持ちかえや移動の動作ができ、大方一人でさっさと取り組めたと見える。

目 標	手だて	様 子
○みんなと一緒に大きな動作をしたり、踊ったりする。	○あまり強制はしなくないが、「手を伸ばして」、「足を広げて」というような声かけをして動作を大きくさせる。	○初めは踊りに見通しがつかないようであったが、1組との合同練習を重ねるにつれ、一人でほぼ踊れるようになった。練習時は、ふざけてかきをきねでたたいたりすることがあったがそれもなくなってきた。
○少しでも大きな声でセリフを言う。	○初めの言葉を少し言ってセリフをはっきりわからせてから言わせるようにする。	○セリフは客席の方まで声がとどくところまではなかなかいかなかったが、「エイ」というかけ声はよく聞こえていた。

[学習発表会評価表(劇)] (図3)



学習発表会でうすを演じるK児

5. まとめと考察

4月にK児の様子を見た時、くつのはきかえ、着がえ、その他日常の行動での緩慢な動作が目につき、この研究と取り組んできた。運動感覚機能も徐々に向上しそのことが動けるという自信につながったり、動きたいという意欲に結びついてクラスや合同学習の中で課題に意欲を持ってさっさと取り組めたとされる面も見られた。しかし、日常生活の中ではまだまだ緩慢な動作が見られる。その要因としては、運動面でもあるが、甘え等の精神的な面も大きなウェイトをしめていると思われる。この運動面と精神面とをどのようにうまくかみ合わせながら指導していくかが今後の課題のひとつである。又現在家庭との協力を得ながら進めている肥満防止の指導も根気よく続けていかなければと考えている。